

令和 7年 1月 30日

福岡県教育委員会教育長 殿

所属校名 宗像市立玄海東小学校
職・氏名 教諭 塚 原 大 志
指導者名 教諭 藤 木 雄 飛

研 修 最 終 報 告 書

このたび、長期派遣研修員として、下記のとおり研修をしましたので報告いたします。

記

- 1 研修種別 C 福岡教育大学附属福岡小学校研修員
- 2 研修場所及び所在地 福岡教育大学附属福岡小学校
〒810-0061 福岡市中央区西公園 12 番 1 号
TEL (092) 741-4731
FAX (092) 741-4744

3 研究主題及び副題

地域社会への関わりを深める第4学年社会科学学習
～複数事例の追究を位置付けた単元構成を通して～

4 研究主題及び副題についての説明

(1) 主題設定の理由

ア 社会の要請から

令和5年の教育振興基本計画では、次期計画のコンセプトに「将来の予測が困難な時代において、未来に向けて自らが社会の創り手となり、課題解決などを通じて、持続可能な社会を維持・発展させていくこと」を挙げている。そこで、本研究において、子供が地域社会の仕組みに問いをもち、問いを追究する中で、人々の営みのよさや特色を捉えたり地域社会が抱える課題を見いだしたりして、自分にできる関わり方について考えることは、有意義であると考えます。

イ 社会科の実践から

社会科は、「グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者を育てる」ことを目的としている。このことから唐木(2016)は、「社会参画」の視点が必要不可欠だと述べている。故に、近年は社会参画型の授業が多く見られるようになった。しかしその一方で、唐木(2016)は課題も述べている。それは、「提案・参加」の側面だけが強調され、問題把握や問題分析の段階で、社会的事象に関する構造的な理解や、関連する基礎的・基本的な知識の習得が不十分になっていることである。そこで本研究では、人々の営みのよさや特色、地域社会が抱える課題を捉えるという過程も重要視し、地域の課題を解決しようと社会参画する素地を育む学習を展開していく。

ウ 福岡県の子供の実態から

令和5年度全国学力・学習状況調査の質問紙調査によると、「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか」という質問に対し、福岡県の児童が最も肯定的に回答した割合は32%であった。令和4年度と比べると高くなってきているが、全国に比べると低いままである。この原因は、問題解決的な学習を通して、社会的事象について学んだ子供たちが、自分の生活と結び付けて考えることが不十分であったからだと考える。そこで、これから生きていく子供たちが、住んでいる地域や社会の出来事の課題に対して関心をもち、自分にできる関わり方は何かを考えながら社会的事象について

学ぶことは、将来、地域や社会をよくしていくための社会参画する素地の育成につながると考える。

(2) 主題の意味

地域社会とは、特定の地域に住む人々が形成する営み、つまり地域に見られる社会的事象のことである。そこでは、人と人が目に見えないつながりをもっており、地域に見られる課題を解決しようと互いに補い合ったり協力し合ったりして人々の生活を成り立たせている。そのような営みのおかげで生活が成り立っているという営みのよさに気付いていく。

地域社会への関わりを深めるとは、身近な地域を中心に複数の地域の事例から社会的事象を捉え、自分たちの生活を成り立たせている人々の営みのよさに気付くことで、自らも地域のためにできることを考えていくことである。このように地域社会への関わりを深めていくためには、1つの事例追究だけでは不十分である。それは、1つの事例追究で捉えた人々の営みのよさや特色、地域社会が抱える課題だけでは、社会的事象に対する十分な認識ができたとは言えないからである。そこで本研究では、複数の地域の事例と身近な地域の事例を比較しながら追究していく学習を構成する。このように学習を構成し、複数の事例を取り扱い、社会的事象に関わる人々の営みのよさや特色、地域社会が抱える課題を捉え、自分にできる関わり方を考えていくことで地域社会への関わりを深めていく。

地域社会への関わりを深める第4学年社会科学学習とは、小学校社会科学学習の目標である、公民としての資質・能力の基礎を育てるために、地域社会に見られる社会的事象から、その仕組みに問いをもち、問いを追究していく中で、人々の営みのよさや地域の特色、地域社会が抱える課題を捉え、その社会的事象の成り立ちについて理解した上で、自分にできる関わり方を考えていく学習のことである。地域社会への関わりを深めるには、複数の事例を取り扱いながら、3つの段階を経る必要があると考える。1つは、一つ目の事例との出会いから人々の取組などから仕組みについて着目した問いをもつ「見いだす」段階。2つは、事例同士を比較しながら、人々の営みのよさや特色、そして地域社会が抱える課題について捉える「考察する」段階。3つは、地域社会が抱える課題に対して自分にできる関わり方を考えていく「構想する」段階である。このように学習を進めることで子供は、複数の地域の事例を通して、地域社会への関わりを深めていくことができると考える（図1）。具体的には次のような子供の姿を目指す。

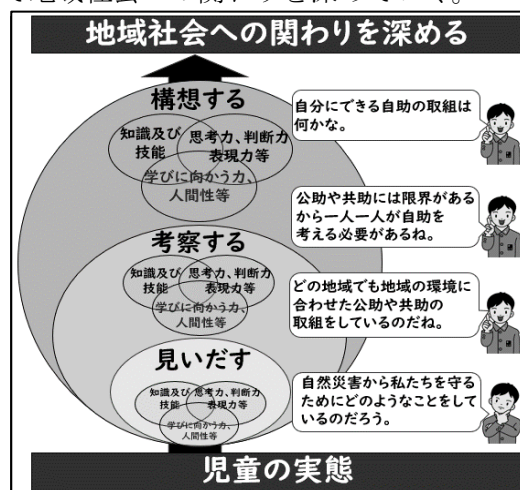


図1 地域社会への関わりを深める段階

- 複数の事例に関する情報を各種具体的資料から読み取ったり、調査活動を行ったりすることで事実を集め、地域社会の人々の営みのよさや特色、地域社会が抱える課題を捉える子供
(知識及び技能)
- 人々の営みについて相互の関係を図に整理したり、複数の事例を比較しながら共通点や差異点を考えたりすることで、人々の営みのよさや特色、地域社会が抱える課題、自分にできる関わり方を表現する子供
(思考力、判断力、表現力等)
- 地域社会に見られる社会的事象の仕組みに問いをもち、主体的に追究しようとしたり、地域社会が抱える課題の解決に向けて自分にできる関わり方を粘り強く考えようとしたりする子供
(学びに向かう力、人間性等)

(3) 副題の意味

複数事例とは、県内における地域の事例と、その地域とは状況の異なる地域の事例や子供の身近な地域の事例を意味する。具体的には、第4学年(3)「自然災害から人々を守る活動」では、市全体のほとんどが平野部である福岡市に対して、市のほとんどが山間部である朝倉市のように状況の異なる事例のことである。この場合の子供の身近な地域とは、子供の自宅を中心とした地区のことである。

複数事例の追究とは、福岡県内におけるいくつかの地域の事例と身近な地域の事例を追究し、比較

することで、共通点や差異点を見いだしながら、社会的事象に対する認識を深めていくことである。共通点や差異点を見いだす価値は、取り扱う社会的事象に関わる人々の営みのよさや特色、地域社会が抱える課題を捉えることができることである。人々の営みのよさとは、社会を支えるために、様々な思いをもって工夫や努力をしている人々が互いに協力し合ったり、補い合ったりしていることである。1つの地域の事例だけではなく、どの地域の事例にも存在するものであることを子供は捉え、人々の営みのよさをより捉えることができる。特色とは、他とは異なり優れているものである。したがって、特色は1つの事例から見いだすことは困難であり、比較することで初めて捉えることができる。地域社会が抱える課題とは、人々が様々な工夫や努力をしているにも関わらず解決できていない問題のことである。これは、取り上げる社会的事象によって地域毎に異なるものもあれば、共通しているものもある(図2)。

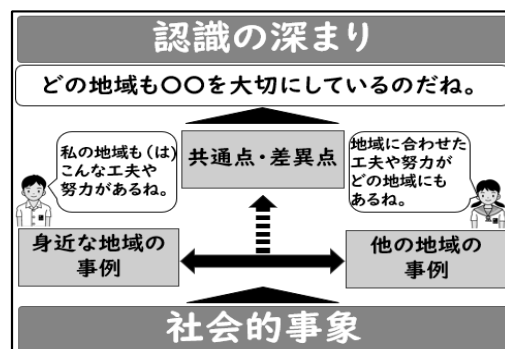


図2 複数事例の追究

複数事例の追究を位置付けた単元構成とは、図3に示すように、単元の①見いだす段階において仕組みに着目した問いをもつ、②考察する段階において、視点を基に比較しながら複数事例の追究を行い、共通点や差異点について考え、人々の営みのよさや地域の特色、地域社会が抱える課題を捉える、③構想する段階において、自分にできる関わり方を考える、という段階で構成することである。このように単元を構成することで、子供は地域社会の人々の営みのよさや特色、地域社会が抱える課題を捉え、自分にできる関わり方として、身近な地域の中で自分に何ができるかを考えていくことができる。このように問題解決的な学習を進めた子供は、将来どのような地域社会においてもその成り立ちに着目したり、課題を見いだしたりして課題解決に向けて関わっていくことができると考える。



図3 複数事例の追究を位置付けた単元構成の具体

(4) 仮説実証のための着眼

ア 複数事例の条件の設定

子供が複数事例を追究し、共通点や差異点から人々の営みのよさや特色、地域社会が抱える課題を捉えたり、自分にできる関わり方を考えたりするためには、地域社会を成り立たせている、人（社会的条件）、もの（自然的・歴史的条件）、こと（経済的・物理的条件）を捉える必要がある。そこで、複数事例の条件を次のように設定する。

- | | |
|---|------------|
| ① 地域社会の人々の願いや、工夫、努力などの人の営みが見えること | (社会的条件) |
| ② 地域社会の自然環境や、時間的経緯、残された伝統、文化が見えること | (自然・歴史的条件) |
| ③ 地域社会の販売や消費、流通、設備や施設などから生活や産業に資する仕組みが見えること | (経済・物理的条件) |

具体的には、第4学年(3)「自然災害から人々を守る活動」では、事例1を福岡市、事例2を朝倉市と設定した場合、表1に示すように、条件を整理し、人々の営みのよさや特色、課題を捉えたり、関わり方を考えたりできるようにする。

表1 複数事例の具体例

	社会的条件	自然・歴史的条件	経済・物理的条件
福岡市	地域防災計画を基に、様々な人々が協力して公助や共助の取組をしている。	・平地が多く、1級河川がない。 ・平成11年、15年の大水害から現在までに改善を図ってきている。	止水板やレインボープランとして浸水対策施設をつくっている
朝倉市	防災のための工夫や努力はあるものの、高齢化が進んでおり、共助や自助の必要性が他地域よりも増している。	・山間部が多く、1級河川である筑後川が流れている。 ・過去幾度となく水害の経験があり、改善を図っているが平成29年にはそれでも35名の被害があった。	砂防ダムの設置や河川の補強を行ったり、避難所を増設したりしている。

イ 複数事例の資料化の工夫

子供が複数事例の追究を通して、地域社会の人々の営みのよさや特色、地域社会が抱える課題を捉えていくためには、共通点や差異点を子供が明らかにしていく必要がある。そこで、次のような複数事例の資料化の工夫を行う。具体的には表2で示すような目的と内容である。

表2 複数事例の資料化の工夫

	資料化の目的	資料提示の内容と具体(○自然災害から人々を守る活動)
事例1	社会的事象の仕組みに着目できるようにする	既存の知識や経験とのズレや驚きが生まれるもの ○大雨特別警報の数や児童アンケート資料
事例2	共通点や差異点から、人々の営みのよさや特色を捉えられるようにする	事例1と同じ視点で整理した資料 ○地理的環境・過去の被害・地域の取組
事例3	地域社会が抱える課題に着目できるようにする	地域社会が抱える課題を読み取ることができるもの ○朝倉市の九州北部豪雨の被害の様子が分かる資料

ウ 連続する学習問題の設定

子供が複数事例について、粘り強く追究するためには、「問い」をつなげ深める必要がある。そこで、図3で示すように、単元構成の中で効果的に学習問題を位置付けることで子供の思考がつながるようにし、複数事例の追究をしながら地域社会への関わりを深めることができるようにする。

(5) 研究のねらい

社会科学習において、複数事例の追究を位置付けた単元構成を仕組むことが、人々の営みのよさや地域社会の特色、地域社会が抱える課題を捉え、地域社会への関わりを深める子供を育てるために有効であるかを究明する(図4)。

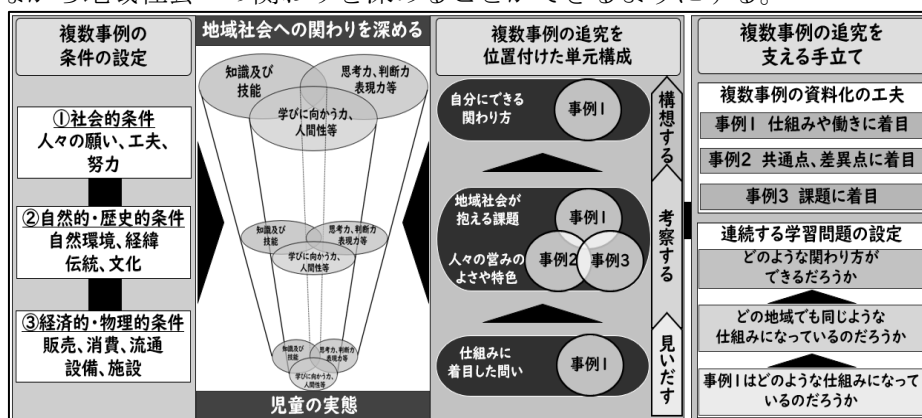


図4 研究構想図

(6) 研究の仮説

第4学年社会科学習において、複数事例の追究を位置付け、条件を設定した複数事例を取り扱いながら、複数事例の資料化の工夫や連続する学習問題の設定を行うことで、子供は共通点や差異点から、人々の営みのよさや地域社会の特色、地域社会が抱える課題をより深く捉え、自分にできる関わり方について考えながら学習を進めることができるであろう。

備考 ○ 在籍校と電話番号 宗像市立玄海東小学校 TEL (0940)62-2500

5 指導の実際（10 月実証）

（1）小単元名 第4学年「私たちの暮らしを守る防災～自然災害から命を守るために～」

（2）小単元の見目

- 複数事例の情報を資料や調査活動を通して集め、どの地域にもある人々の暮らしを守るための公助や共助の取組、そして自助の必要性という課題を捉えることができる。（知識及び技能）
- 複数事例を比較し、どの地域にもある人々を守るための取組について考えたり、自助の考えが必要であるということを考えたりして、自分にできる自助の取組について表現することができる。（思考力、判断力、表現力等）
- 自然災害から人々を守る取組について立てた学習問題を基に、自ら資料や調査をして追究しようとしたり、自助の取組について粘り強く考えようとしたりする。（学びに向かう力、人間性等）

（3）計画（全9時間）

- ア 福岡市の防災について調べ、学習問題を設定し、学習計画を立てる。————— 1時間
- イ 複数の事例を追究し、比較しながらどの地域にもある営みや課題について話し合う。— 6時間
- ウ 自然災害から自分の命を守る取組について考え、マイ防災計画をつくる。————— 2時間

（4）小単元の仮説

- 第4学年小単元「私たちの暮らしを守る防災～自然災害から命を守るために～」の学習において複数事例の追究を位置付け、次の手立てを行えば、地域社会への関わりを深める子供が育つであろう。
- 身近な地域と福岡市及び朝倉市の事例の条件設定【着眼ア】
 - ①大雨特別警報の数と自然災害に対しての危機感に関する児童アンケート資料の比較、②地理的環境、過去の被害、地域における防災の取組の視点でまとめた資料、③九州北部豪雨の様子が分かる資料等の複数事例の資料化の工夫【着眼イ】
 - 福岡市の防災の仕組みに着目した学習問題Ⅰの設定、他の地域でも同じような防災の仕組みがあるのかをつなげる学習問題Ⅱ及び、自分自身の身を守るための自助の取組につなげる学習問題Ⅲ、という子供の思考が連続する学習問題の設定【着眼ウ】

（5）指導の実際

ア 導入段階（1／9時間）

導入段階では、「誰がどのようにして自然災害から人々を守っているのか」というどの地域社会にもみられる問いを踏まえた学習問題を設定することをねらいとした。そのために、まず、「大雨特別警報」に関する資料を提示した。その後、福岡県は大雨特別警報が一番多いことが分かる資料を提示した。すると、A児は「一番多いのに私は危険を感じたことがないのはなぜか」といった問いをもった【着眼イ】。そこで、A児は、「今はこのようなことは起きていない、誰かがこのようなことが起きないために何かしているのではないか」と発言した。このような問いを基に「福岡市では、どのようにして自然災害から人々を守っているのだろうか」という学習問題Ⅰを設定した【着眼ウ】。

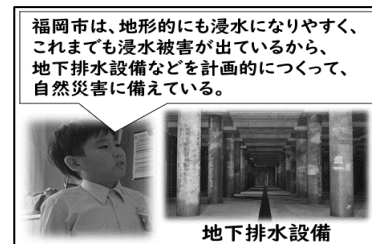
考察1

導入段階で、生活経験とのズレや過去の事実に関する資料を提示したことは、仕組みに着目した問いを生み出す上で、有効であったといえる【着眼イ】。これは69名の児童のうち、60名（約88%）が自然災害から人々を守る取組についての問いをもつことができたことから分かる。

イ 展開段階（7／9時間）

展開段階では、複数事例の追究を位置付けることで、どの地域においても自然災害から人々を守るために、地理的環境や過去の被害を基に、計画的に関係機関や地域の団体が公助や共助の取組をしているという工夫や努力を捉えるとともに、公助や共助を働かせるためには、自助の考えが必要であることを捉えることをねらいとした。学習問題Ⅰを基に追究をしたA児は、福岡市は平地が多く1級河川がないことから、福岡市は浸水被害が多いことを地形と過去の被害を結び付けて考えた。また、山王調整池などの排水設備を整えている事実から、地理的環境や、過去の被害を基に防災の取組が行わ

れていることを捉えた（資料1）。次に、福岡市の事例のような仕組みが、身近な地域や他の地域にもあるのかという問いをもつことができるように、教師の身近な地域の事例提示をした。するとA児は、「僕の住んでいるところや他の地域も同じような仕組みがあるのか」という問いをもった【着眼イ】。これらの問いを基に「他の地域でも同じように自然災害から人々を守る仕組みがあるのだろうか」という学習問題Ⅱを設定した【着眼ウ】。この学習問題を基に、福岡市の事例で獲得した視点で、まずは身近な地域の事例を追究した【着眼ア】。するとA児は、「僕の家は二級河川の室見川が近くにあり、氾濫した過去もある。そのため、早良区役所では、災害情報の発信や河川のウェブカメラの設置を行っている。」といった発言をした。その後、地域社会が抱える課題に着目することができるように、朝倉市の九州北部豪雨の様子が分かる資料を提示した。するとA児は、「朝倉市では、35名の被害が出ている。同じような取組はされていなかったのか。」という問いをもった【着眼イ】。追究を終えたA児は、「砂防ダムの設置や河川の改修など、地形が違うから取組も異なるが、地形や過去の被害から防災の取組をしているところは同じだ。」と、同じように自然災害から人々を守る営みのよさや特色があることを捉えた後、「公助や共助の取組はあっても、想定を超える災害の前では、自助を働かせないと機能しない。」と発言した。このような追究から「自然災害から自分の身を守るために、どのような自助の取組をしていくべきだろうか」という学習問題Ⅲを設定した【着眼ウ】（資料2）。



資料1 展開前段のA児

- C1: 朝倉市でも砂防ダムや河川の改修工事をしているのに、どうして被害が出たのかな。
 C2: 想定を超える災害があると公助による備えだけじゃ守れないのだね。
 C3: 一人一人が自助を考えていく必要があるよ。

資料2 学習問題Ⅲを設定する場面

考察2

展開段階において、複数事例の追究を支える手立てとして、連続する学習問題を設定したことは、自然災害から人々を守る努力や工夫を捉える上で有効であったと言える【着眼ウ】。それは69名の児童のうち56名（約82%）が、資料1や資料2のように複数事例に共通する防災の仕組みを捉えることができていたからである。これは、複数事例の資料化の工夫が有効に働き、連続する学習問題の設定によって子供の問いをつなげることができたからだと考える。

ウ 終末段階（8／9時間）

終末段階では、被害を減らすために、自分にできる自助の取組を考えることをねらいとした。そのためにまず、どのような取組が有効であるかを知ることができるように、共助の取組と自助の取組を広げる活動をしている博多あんあんリーダー会の方をGTとして招聘した。するとA児は、自身の住む地域の地理的環境や過去の被害【着眼ア】から、素早く避難する必要性があることを踏まえた上で、その際に持って行く防災セットの中身に着目し、GTにどのような物を持って行くことが有効かを尋ねた。そして、GTから教わったことや、これまで学んだことを基にマイ防災計画を作成し自分の考えを保護者に伝えた（資料3）。

僕が住んでいるところは二級河川の室見川があり、氾濫したこともあります。だからなるべくすぐに避難する必要があります。早良区の防災ハンドブックに避難所が書いてあるので、そこに防災バックをもっていきます。防災バックには教えてもらったものを入れます。

考察3

資料3 終末段階のA児の記述

終末段階において、身近な地域の地理的環境や過去の被害や地域社会が抱える課題を踏まえた上で、自分にできる自助の取組を考えることができていた児童は69名のうち22名（約32%）であった。これは、複数の事例を扱っているにも関わらず、地域社会が抱える課題を捉える際に、2つの事例のみで捉えていたからである。子供が地域社会が抱える課題を基にした関わり方を考えていくためには、複数事例の人々の営みのよさや特色と地域社会が抱える課題を結び付けて考える必要がある。

（6）全体考察

地域社会への関わりを深める子供を育むために、複数事例の追究を位置付けたことは展開段階の子供の記述や姿から有効に働いてきていることが分かった。しかし、十分とは言えない。そこで、複数事例の追究の位置付けを整理し直し、子供が人々の営みのよさや特色と地域社会が抱える課題を結び付けてより深く捉えることで、それらを基にした選択・判断に迫っていく必要があると考える。